

魂と死後の生の証明をもくろむ科学

Marie Corelli の反実証主義

唐戸 信嘉

序論

マリー・コレリ (Marie Corelli, 1855-1924) はヴィクトリア朝文学の研究対象としてはマイナーな作家だが、19世紀末イギリスでは最も広く読まれた作家の一人である。1886年の処女作 *A Romance of Two Worlds* で衝撃的なデビューを果たし、同世代のコナン・ドイルやラディヤード・キプリングを凌ぐほどの人気を誇った。彼女の小説群には霊的実在への強い確信、ならびに制度的・形式的なキリスト教への懐疑が通底しており、時代的な世俗化の流れへの批判が重要な主題をなしている。*The Sorrow of Satan* では悪と救済の問題を、*Barabbas* ではキリスト教的モチーフを独自の解釈で再生し、いずれも宗教と道徳の問題を通俗的な物語で表現した。

コレリの思想は一般に世紀末スピリチュアリズムや神智学の一変奏として位置づけられることが多い。本発表ではその大枠を認めつつも、1892年の作品 *The Soul of Lilith* の詳細な分析を通じて浮かび上がる、同世代のスピリチュアリストたちとの差異に注目した。スピリチュアリズムの一翼を担いながらもそれを対象化し、方法論の限界を冷静に見つめていた点こそが重要である。とりわけコレリの思想は、現代の科学的唯物論やリアリティ問題を考察する上でも先鋭的な議論を展開しており、改めてその思想的意義を再評価することが本発表の目的である。

第1節：スピリチュアリズムの科学的実証主義への批判

The Soul of Lilith の主人公エルラミは、東洋出身のメスメリストで、シリアで出会った少女リリスを仮死状態に保ちながら、彼女を通じて死後の世界の科学的証明を試みる。エルラミの口癖「証明できない限り実在を信じない」(27)は、実証主義的な時代精神をよく体現している。エルラミの、死後の生に期待しつつ、それを科学的方法論で証明しようとする態度は当時のスピリチュアリストのそれと明らかに重なる。特に、心霊研究協会の中心人物の一人だった F.W.H.マイヤーズの主張と著しく重なる部分がある。マイヤーズはその主著 *Human Personality and Its Survival of Bodily Death* (1903) において、「これまで人間は自らの最も深く関わる問題に対し、最も有効であると証明された探求の方法を適用していない」(ch. 1) と述べ、科学的に霊的世界を探究することを提言し、「個人の人格が肉体の死を超えて存続しうるものを備えているかどうか」の証明をもくろむ。マイヤーズは「潜在的自己」という概念を軸にして、意識下に広大な精神領域が存在し、それが死後も存続すると考えたが、この発想はエルラミの思想とほぼ同型である。両者はいずれも、霊的な問題に適用されてこなかった近代科学的方法論を応用し、個人の人格の死後存続を実証しようとする点で一致している。

S. E. D. ショートが論じるように、こうした態度はダーウィン主義と実証主義がもたらした「信仰の危機」(340)への応答であり、科学の権威を逆用して宗教的真理を証明しようとする運動の一環であって、当時のスピリチュアリズム全体に広く共有されていた態度だと言える。その象徴の一つが心霊写真であり、ウォレスは心霊写真を「霊の客観的実在の証拠」(qtd. in Shortt 342)と断言したが、浜野志保が現代的な立場から批判するように、写真は存在しないものも写し得るのであり、真の証明にはなり得ない(76)。*The Soul of Lilith* というテキストは、エルラミ＝マイヤーズの、いわば典型的なスピリチュアリストの態度を批判し、物質と精神の非連続性を主張する後年のベルクソンの立場へと接近してゆく。コレリはベルクソンに先駆けて、この問題を *Lilith* において掘り下げるのである。

第2節：The Soul of Lilith における科学的方法論との訣別

デビュー作では魂を電氣的エネルギーとして捉え、スピリチュアリストたちと同様の立場をとったコレリだが、*Lilith* ではその立場が根本的に問い直されることになる。エルラミの実験は心霊写真やマイヤーズの心霊研究と同型であるが、コレリは本作において主人公エルラミの試みを批判する方向へ舵を切るのである。エルラミは「霊の力に関心があり、物質そのものには関心がない」(49)と言いつつも、実際には物質的手段で霊を捕捉しようとする。彼の理念と方法は矛盾しており、弟フェラズや師の修道士がエルラミの批判者として登場する。リリス自身も「あの世には死は存在せず、変化があるのみ」(22)という抽象的な証言しかエルラミにもたらさない。そしてリリスは次第に個人としての人格を失い、宇宙的な存在へと変容し、最終的に彼女の身体は塵と化して消えてしまう。かくして死後の人格存続というエルラミの願望は決定的に退けられることになる。

神智学の創始者ブラヴァツキーもまた、個人の人格の死後存続を「有限ではかない偽の自己」(ch. 2)として否定しており、この点でコレリの認識は神智学に近い。エルラミの試みは失敗に終わり、彼は精神的崩壊に至る。この結末は、霊的存在を物質的手法で把握しようとする自体が唯物論的だという事実を暴露するものである。

1913年に心霊研究協会の会長に就任したベルクソンは、物質と精神の非連続性を強調し、物質的・分析的手法では生命や意識の本質を捉えられないと主張することになるが、コレリの議論は（緻密な学問的裏づけはないものの）、ベルクソンにおいて本格的に展開される反実証主義を予告し、先取りするものである。

第3節：リアリティの問題とその現代的意義

エルラミを悩ませるのは、リリスの証言がたとえ真実であっても客観的事実たり得ないという問題である。彼は「私に語りかけているのは彼女の霊か、それとも自分の脳が彼女に作用しているだけか」（23）と自問する。経験が常に脳というフィルターを経由し、客観的実在への直接的アクセスが原理的に不可能であるという、根本的な認識論の問題がここで明らかになる。彼は彼女の証言に望みを託して実験を続けるが、脳を経由した証言はどこまでいっても証明にはならない。「証明できるものこそリアル」という前提そのものが、エルラミ自身の科学的立場（いかなる経験も脳を経由した主観的なものであるほかないという自覚）によって突き崩されてしまうのである。

リリスが個人的人格を失った後、フェラズは「無限なるものこそ真実であり、私たちの生は有限で実在とは呼べない」（141）と語る。フェラズの考えにおいては、現世のリアリティは格下げされ、知覚できないあの世こそが真の実在である。あの世が現世と異なる認識論的次元であるなら、写真であれ脳科学であれ、現世の手法でそこに到達することは原理的に不可能である。フェラズによれば、エルラミの失敗は能力不足ではなく、試み自体の誤りに起因する。

この議論は今日的意義を持つ。画像生成 AI やディープフェイクが視覚的証拠への信頼を根底から揺るがす現代において、可視化できないものこそリアルだとするコレリの主張は依然として有効である。また「意識のハードプロブレム」（なぜ脳内の物理的プロセスが主観的意識を生むのかという問い）が未解決である現代の神経科学においても、脳のすべての活動を可視化・測定できたとしても、測定された脳と意識の溝は埋まらない。エルラミの直面した脳というフィルターの問題は、今日においてこそかえって鋭さを増しており、色褪せない問題に焦点を当てていることがわかる。

結論

The Soul of Lilith でエルラミが陥る絶望と破滅は、マイヤーズらの心霊研究が抱える矛盾を10年ほど先取りして描き出したものである。*Lilith* というテキストが主張する、霊的なものを科学的に実証しようとするものの限界と矛盾、個人の人格の死後存続への懐疑、現世と霊的世界を同一平面に置くことへの拒絶は、きわめて先見的である。コレリは世紀末の科学的イデオロギーへの鋭い批判者であり、単なる通俗的スピリチュアリストとして片付けることはできない。さらに、エルラミの問いは19世紀末の心霊論争にとどまらぬ射程を備えている。脳というフィルターを経由しない認識が原理的に不可能である以上、唯物論的なリアリティへの信頼は揺らがざるを得ない。証明できないがリアルなもの（たとえば私たちの感情や意識）をいかに扱うべきか。*Lilith* のテキストが突きつけるこの問いは、科学的唯物論に立脚した方法論が依然として優勢な現代においても、その有効性を保持し続けている。

引用文献

- Blavatsky, H. P. *Key to Theosophy*. 1920. Project Gutenberg, www.gutenberg.org/files/55618/55618-h/55618-h.htm.
Corelli, Marie. *The Soul of Lilith*. 1892. Robinia Classics, 2024.
Harris, Racheal. *Photography and Death: Framing Death throughout History*. Emerald, 2020.
Myers, Frederic W. H. *Human Personality and Its Survival of Bodily Death*. 1903. Edited by Leopold Hamilton Myers. Project Gutenberg, 1906, www.gutenberg.org/files/38492/38492-h/38492-h.htm.
Shortt, S. E. D. "Physicians and Physics: The Anglo-American Medical Response to Spiritualism, 1870-1890." *The Journal of the History of Medicine and Allied Sciences*, vol. 39, 1984, pp. 339-355.
浜野志保『写真のボーダーランド：X線・心霊写真・念写』青弓社、2015年